

勝連の第十代城主

阿麻和利は、第十代目の、そして最後の勝連城城主でした。彼の生涯は伝説にうたわれていますが、謎に包まれてもいます。野心的で有能な指導者であった阿麻和利は、農業の改善と広範な海外貿易、そして地方の征服を通して勝連と周辺の地域に最盛期をもたらしました。阿麻和利についての史実的な記録はあまり残されていないものの、多くの逸話が伝えられています。彼は農民の出身で、大変身体が弱く10歳になってもほとんど歩けないほどだったと言われています。家族は彼を山に棄て、野垂れ死にさせようとしていました。しかし、彼は持ち前の機転と洞察力で生き延び、強い若者に育ちました。伝説によると、彼はクモが巣をかけるのを観察することによって、この地域で最初の漁網を発明しました。阿麻和利は、当時放蕩で残虐な大酒飲みの茂知附という城主が支配していた勝連城に行きました。

阿麻和利は最初城の馬番を任されましたが、町の人々の愛と尊敬を勝ち得ながら、徐々に出世していきました。茂知附が王国を破滅に導いていると確信し、また、正統な後継者がいないことから、阿麻和利は16世紀初期（正確な年は不明）に茂知附を退けました。伝説によると、ある晩阿麻和利は町の人々に、彼が酔って大暴れする茂知附と話している間に火のついた松明を持って丘の下からゆっくりと城に近づくように言いました。彼は茂知附に城が攻撃されていると告げ、茂知附は侵攻する敵軍の松明が見てそれを信じました。伝えられるところによると、阿麻和利は慌てふためいた茂知附が状況を確認するために一番高い城壁に登ったところに飛びかかっていき、茂知附を殺しました。

阿麻和利はすぐに力を強め、彼の野心を恐れた琉球王国の尚泰久王は、娘の百度踏揚を彼と結婚させました。政敵であった護佐丸を破った後、阿麻和利は琉球王国を転覆させようと謀ったかどで、1458年に攻め滅ぼされました。阿麻和利がこの最後の戦いで死亡したことはほぼ確実ですが、一説では、彼は城内にあるウシヌジガマという神聖な洞窟を抜けて、読谷山間切に向かい、そこで身分を隠して漁網を編みながら暮らしたとされています。